

タイトル：2019年度 教育セミナー（第15回）

日時：2019年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

井森 彬太（東京外国語大学大学院）

私は4日間の間、中東☆イスラーム研究セミナーに参加しました。同セミナーは法学、歴史学、政治学といった様々なディシプリンの下で研究を行う大学院生や先生方が一同に会するもので、そのなかでさまざまな発表を行いました。また、私自身もポスター発表を行う機会を得ました。4日間が終わったいま、私は非常に貴重な学びを得たと感じています。

私は東京外大の学部を卒業後、大学院に進学し、イスラーム教の中の少数派であるドゥルーズ派の国民統合やナショナリズムなどに関心を持ち、研究を行っています。しかし、いままで「中東・イスラーム」という広い枠組みでの研究会に出たことはありませんでした。

「イスラーム世界」という括りは、あまりに広すぎるとして「仏教世界・キリスト教世界」と同様に、分析の枠組みとしてあまり意味がないのではないかという意見もあります。また、このような枠組みがイスラームに関する本質主義的な理解を広めているのでは、と危惧する先生方もいらっしゃいます。

しかし、セミナーの冒頭の飯塚先生の「自戒をこめて、イスラーム/ムスリム地域研究の難しさを考える」は、そのような指摘を念頭に置いたうえで、本質主義を超えてイスラーム・ムスリム地域について考えていく趣旨のものであり、感銘を受けました。

今回の発表は、歴史的な資料の分析に基づくものが多かった。私はいままで中東地域を歴史的視点から見る授業や研究会にあまり出ることがなかったため、このことは大きな刺激となりました。また、前近代の歴史について取り上げつつも、近代のナショナリズムに基づいた、前近代へのまなざしについて触れた発表が多く、イスラエル・パレスチナのナショナリズムに関心を持つ私にとっても、とても参考になるものでした。

一般に、ナショナリズムに関しては、前近代との連続性を重視する態度と、近代になって印刷などを通して創出されたものという2つの態度があります。東アラブ地域のナショナリズムを見ると、どちらのアプローチを採るべきかは難しい問題であると思っています。私はポスター発表の中で、このナショナリズムや、ドゥルーズ派市民のアイデンティティーの問題を取り上げましたが、その中で先生方から貴重なご助言をいただきました。このこともまた、今後に生かしていきたいです。

また、正規のセミナーのカリキュラムの他にも、授業後の懇親会などでも研究や、それ以外の中東生活もろもろについて情報交換ができたことは、とてもためになり、楽しいものでした。

最後になりましたが、先生方ならびに受講者のみなさん、および裏方として支えてくださった千葉さんに深く感謝申し上げます。